

今の若者が考える ボランティア

頭を、KOBEBに垂れて、

CODEにも垂れて、足るを知る

—— 足るを知らざる者は富むといえども貧し

KOBEBとの出会い

私がKOBEBと出会ったのは、大学生になってからでした（KOBEBとは阪神・淡路大震災の被災地・被災者は当然として、国内外で救援に関わった人たち全てを含む地域・コミュニティ・人を表す。行政区画の神戸市などとは別）。小さいころから平和という言葉に興味を持ち、大学に入ってもボランティアやNGOという分野にアンテナを張っていました。何気ない大学生活の中で唯一気がかりだったのは、ボランティア情報を統括・発信するようなセンターが大学内にないことでした。実は私が高校生の時に、この

種のボランティアセンターを立ち上げようと孤軍奮闘した経験があるので、その当時はなかなか態勢を整えることができず、旗振り役で何かを始めるということをしたことがなかったため、失敗に終わるといって辛い青春があったのです。この悔恨の思い出を、花の大学生活にはつくりたくなかったのを、入学直後はボランティアセンターを大学内に作ってやろうと意気込んでいました。しかしそこはやっぱり人間、というより大学生。部活動↓バイト↓部活動↓遊び↓テスト前勉強というサイクルに慣れてしまつて、いつの間にかボランティアを考えることは少なくなっていました。そんなある日の事、



尾澤 良平

CODE 海外災害援助市民センター

【おざわりょうへい】大阪生まれ。学生時代に神戸で災害・復興ボランティアと出会い、卒業後にCODEでのスタッフを始める。アフガニスタンぶどうプロジェクトやインドネシア呼び水プロジェクト、イタリア中部地震初動調査などの業務を担当

部活も引退し、あとは卒業後の事だけを考えるか、という時になって、なんともストレートな二人の友人の言葉が同時に耳に飛び込んできたのです。「震災の話は神戸ではあんまりできへんで」と、被災経験のある友人。「震災を通して、ボランティアセンターみたいななん作ってみたいひんか」と、震災後に発足したNGOでバイトをしていた友人。

少年よ、どこへ行く

まず一人目の友人から兵庫県に地震があったことと、まだその影響が根強く残っていることを聞きました。今思えば当たり前のことなのですが当時は

四川で吉椿さんと出会う（左から2番目）。筆者右から2番目。



そんな意識は全くありませんでした。そして二人目の友人から、災害時に多くのボランティアが神戸に集まり（二カ月で一〇〇万人を優に超える）、いろいろな奇跡を生んだことを聞きました。自分がまだ小さいころにそんなことがあったのかと、とても驚きました。そこに重ねて、センター作ろうぜ！の誘いですから、二つ返事で「やろう！」と返しました。結論を先に言うと、大学がボランティアセンターを設立するということもあり、我々の団体はサー

クル止まりに終わったのですが、そこで学んだことや出会った人は今でもかけがえのない財産になっています。災害当時にボランティアをした方ともたくさん出会い、復興住宅で出会った被災者の方たちからは震災のさまざまな側面を教えてもらいました。しかしながら、自分の中では地震は天災だから考えても仕方がない、という気持ちがあつたかもしれません。卒業後の将来を考えるにあたっては全く「災害・防災」を考慮しませんでした。もとい、正直言いますと自身の「将来」について考慮していませんでした…。と言う訳で、自分の道などをなかなか決めることができずにいたのですが、それでもなお、ずっとボランティアや平和という言葉は頭の片隅に残っていました。そのような暗中模索の状態の中で二〇〇八年五月一二日に四川大地震が起きたのです。足が四川に向くのに時間はかかりませんでした。

四川での出会いから CODEへ

出発前の私の気持ちの中には、「何もできないかもしれないけど、何かはできるのではないか」という、前向きかつ前向きな、つまり前向きなみの気持ちでした。自分の可能性を試したかったのかもしれませんが、もちろん色々な

悪い状況を想像しましたが、考えても仕方がないことで、迷惑千万なことにはならないようにだけを心がけました。知り合いの災害ボランティア関係者に一報を入れて出国しました。そのような状況の中で出会ったのがCODEの吉椿さんでした。今となってはおいしいソバの作り方を教えてくれるような気さくな先輩スタッフですが、出会った当初は災害発生直後ということもあり、「なんだこの人は!!」という印象しかありませんでした。昼は自らの嗅覚を頼りに被災地を調査し、中国語を使いこなしながら被災者に寄り添い、夜は情報収集・報告でほとんど寝ない。四川での活動を共にして、NGOやボランティアの力強さと厳しさを学んだ気がします。

自然災害と向き合う

さて、自然災害という言葉はとても興味深いものです。普遍的で自ら然るべき状態が、結果として災いであり害であると捉えられる。自然とはそうあつて然りだから自然であるはずですが、しかしそれを人間は不自然な動きだと騒いでいる。私にはこの自然災害という言葉に語彙矛盾があるように思えてなりません。災害を災害たらしめている要素の一つに自然状態の人工化があります。豊かな木々を伐採し、山の

CODEのルーツ

CODEの事務所は神戸にあります。みなさんご存じのように、今から約14年前、1995年1月17日午前5時46分、阪神・淡路大震災が発生し、多大な人的・経済的被害をもたらしました。この時に神戸を中心とするボランティアの連絡会議を取りまとめていたのが、神戸NGO界の重鎮である故草地賢一さんであり、さらにその救援連絡会議の分科会の1つとしてボランティア活動を支援していたのが、現在私のボスである村井雅清さんであったのです。

村井さんは、ここでの活動を引き継ぐ形で被災地NGO協働センターという任意団体を設立し、国内外を問わず災害救援活動を行ってきました。その中でも海外の災害に特化し、より体系的な活動を行うため、様々な素質を持つ市民が互いに協力できる拠点として設立されたのがCODEです。村井さんは被災地NGO協働センターの代表であり、CODEの事務局長です。支援活動の中でもCODEは災害発生直後の緊急支援よりも中長期的な復興支援に重きを置いています。

幸いにも日本で災害に見舞われた場合、よほど大規模な災害でない限り、食料や水といった最低限生きるためのライフラインはすぐに手に入るでしょう。問題はそのあとの復興段階です。KOBEでの経験から、復興段階での市民・ボランティアの支援の重要性がとても高まっています。

CODEはこのことを念頭に、世界の災害に立ち向かっています。つまり私たちの活動のルーツは阪神・淡路大震災にあるのです。

斜面を削って道路や家を建てる。河川の周囲をコンクリートで固め、狭い土地に建物を密集させていく。このような自然の人工化が災害を発生させ、被害を多大にしていることは明らかです。確かに自然との共生といえども、地震に合わせてダンスを踊るわけにはいきませんが、そもそも一概には言えませんが、そのような側面を根底に置いておかないと、その後の減災や防災についての対応がおかしくなってきました。この点に関して、次の物語はなかなか含蓄に富

んでいるので、ぜひご紹介させてください。

リングゴの種は何の種？

はてしなく広い宇宙の一角に、地球人とよく似た風貌の人たちが住む惑星「キョード」があります。豊かな自然に恵まれた地球とは対照的に、惑星「キョード」はその表面のほとんどを砂漠に覆われており荒涼とした大地が広がっていました。ある日突然、どこからともなくこの「キョード」に黒い隕

石が降ってきました。地表に届いた隕石はものすごいスピードで地中深くもぐっていきます。ただ突然とこと成り行きを見つめるしかない「キョード」人を尻目に、その後には大きな穴がぼっかりと口を開けた状態で残されました。

それから数カ月後、この穴からニョキニョキと、何やら緑の物体がまっすぐ空に向かって伸びていきました。実はこの黒い隕石、「地球」人の宇宙飛行士ユキが宇宙空間にポイッと放ったリングゴの種だったのです。キョード人の少年キヨは、植物といえはコケの一株くらいのものでしか目にしたことがないので、この超巨大なリングゴの木が成長していくのをただただ見守っていることしかできませんでした。

そして数十年の時が経ってこのリングゴは実を生らせる大木になったのです。大木の影の下で涼しく暮らせるようになったこと、落ちてくるリングゴの甘さを知れたこと、既に年老いたキヨはこの幸せを家族や知り合いに広めました。落ちてくるリングゴといえども、それは「地球」のリングゴ。「キョード」人にとっては、とても巨大なものでした。ドーン！ とリングゴが落ちてくるのをキヨは畏れ多いことだと思い、奉るようになりまし。そして大事に大事にこのリングゴを頂いたので。これは何よ

りも人々にとつての潤いとなっていたのです。キヨは少年の時に見た、あの黒い物体を幸せの種と呼ぶようになりました。

しかし、このリンゴの噂を聞きつけた惑星「キョード」中の住民が少しずつ、大木の下に集まってきたのです。リンゴの甘さを求める虫のように。当初木の影をたつぷり使え、リンゴもたくさん食することができたキヨとその家族は、だんだん堅苦しい生活を強いられるようになりました。それに加えて、毎年落ちてくるリンゴが時々家屋を直撃してダメージを与えるようになったのです。リンゴは災害の種と呼ばれるようになっていきました。そこで人々はこのリンゴの被害を減らすことができるかを考えました。ある



大きな被害を受けた栗駒山を望む

ものは砂漠の獣たちが持つ毒を木にぬり、またあるものは、ちまちまと根を切り始めました。キヨは大いに反対しました。交代で影の下で住もう、リンゴの木は大切にしよう、と人々を説得しました。しかしそんなことには誰も耳を傾けません。他の人は作業を続けました。とはいっても、小さな「キョード」人が行うことは大木に大きな影響を及ぼすことはなかったのですが。

リンゴは善？ 悪？

それからまた何十年とたったでしょうか。この一本の大木の下はもう人だいつぱい。リンゴが落ちれば必ず誰かに当たる、という密集度に到達していたのです。その一方でリンゴを無くす方法も最初はそれほど効果がなかったのですが、技術が進んでいき、だんだんと効果が出てくるようになりました。「キョード」人はあらゆる対策方法を考え出しました。知恵を絞るだけ絞りました。そうしている間に本当にリンゴが落ちてくるのが少なくなりました。リンゴを食べることがめっきり減ったことは残念でしたが、みんな仕方がないといった感じでした。しかし、少なくなつたのはリンゴだけではありません。なんと、涼しい日陰を作ってくれていた葉っぱまでもが少なくなっていくではありませんか！ そうい

ば大木の幹もしななつと弱くなつた感じも見て取れます。人々はまた強い日差しの下にさらされ始めました。そしてとうとう、育つたリンゴの実も見えていた限りでたった一つとなりました。

こともあろうに、人々は頭上にあるその一つのリンゴと小さくなつた影を求めてケンカを始めたのです。大木の下はどんちゃん騒ぎ。もうみんな好き放題しました。太陽はギラギラ、ケンはピンバシ。こんな状態が何カ月か続いたので、もう誰もが争うことに疲れてしまいました。疲れているのになぜか争いを止められない。頭上のリンゴが争いを生んでいるのでしょうか。人々はリンゴを争いの種と呼びました。リンゴが落ちる時期になったときにはすでに人々は疲労困憊し、暮らしては荒廃してしまいました。それでもまだ争いを続けようとしているとき、突然地面がぐらぐらと揺れだしました。グラグラグラグラ、ガッシャーーン!!……

天変地異、すべてのものがひっくり返つたのです。生き残つた少数の「キョード」人は大木が倒れていることに気がつきました。どうやら弱くなつた大木が根こそぎ倒れたので、地面が揺れたのでしょうか。元々影の下にあった街はすべて無くなり、一つのリンゴだけがポツンと残りました。キヨの子孫



であり、ヒゲをいっぱい蓄えた長老ミチがこのリンゴを前にしてみんなにこう言ったのです。「こんな争いの種になるようなものはみんなで手分けして深いところに埋めよう。ワシのご先祖さまはリンゴを大事に大事にして食べたそうじゃ。我々のような食欲なものが今、この大事なものを口にしてはいけない。これからはよく話し合って生きていこう。」人々は何もいわずにうなずき、手分けをしてリンゴを細かいブロックにし、それぞれ散らばって地中深く埋めました。

そうしてしばらくするとなんとまた各地でリンゴが生えてきたではないですか。人々は同じ過ちを繰り返さないよう、大事に苗を育て、そしてリンゴをまた埋め、そしてまた育て。こうしているうちに「キヨード」は緑あふれる平和な惑星になりました。それからというもの、リンゴは復興の種と呼ばれるようになったとき、おわり。

私にとつての災害

この話の中に、私がなぜ災害ボランティアをしているか、どう思つて災害と向き合っているかをすべて凝縮したつもりです。まだまだ未熟のリンゴの話ですが。災害というものは単なる損害を生むものでしかないという割り切るのはもつたないのです。災害はすべてを含むといわれます。それまでその地域に潜在的に存在していた問題（限界集落や家屋密集、コミュニティ力不足や環境問題、貧困等）を顕在化させます。そこと真剣に向き合うということとはとても大事なことです。それは足るを知ることでもあり、人とのつながりを知ることでもあります。これらはまさしくK O B Eが教えてくれたことであり、C O D Eが広げようと思つていることでもあるのです。私はこの事を、岩手・宮城内陸地震の復興活動やジャワ島中部地震呼び水プロジェクト、アフガニスタンぶどうプロジェクト、エクトなどの業務を進めていく中で学びました。

リンゴ一つ、いかがですか？

パソコン業務をしていると、ふと横目に青々と生い茂る庭のジャングル（実際は愛情のこもったガーデンです）が目に入ってきます。ここを見るとボランティアやNGOのことについて根本的に考えさせられます。今のボランティア社会、NGO・NPOシステム、防災教育などは正しい方向に向いているのか。さすがのCODEは、このリンゴに対してとても画期的なのだが、しかし幾分か立ち返るべきではないかと思われる態度をもつて臨んでいます。リンゴの酸いも甘いも知つているといつたところでしょうか。みなさんも一度この果実について思索にふけてみませんか？ ちなみに、CODE事務所庭にはリンゴはありませんが、ザクロ、ナツメヤシ、ビワ、バナナなどはありません。落ちてくもかゆくもありませんが、おいしいと思うかどうかはあなた次第です。私にはとてもおいしく感じました。私は現在、食べた後に残った種をどこに埋めようかと日々考えているところです。